

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

1962/9



ROOIS

monthly magazine kobekko september 1962 no. 18

昭和37年9月1日発行 (毎月1回1日発行)

MIKIMOTO PEARL

永遠の輝き、ミキモトパール……………



何代にもわたって愛される
輝き、その永遠の美しさと
気品は、爽やかな秋の装い
のポイントです。



御木本真珠店

本店—東京
銀座四丁目

神戸店—三宮・神戸国際会館 大阪店—堂島・新大ビル

TEL 神戸 (22)62

TEL 大阪 (361)0220

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



神戸と女性

倍賞千恵子・岩下志麻さん
(神戸国際松竹で...)





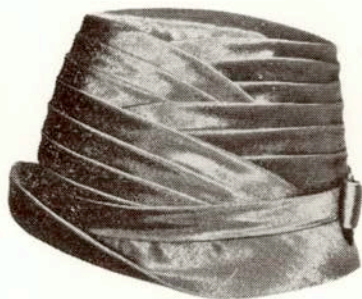
株式・債券・投資信託

大商証券

神戸支店 TEL ③ 7691
 神戸市生田区三宮町3の22の3
 尼崎営業所 TEL ④ 5543
 尼崎市神田北通2の24
 芦屋営業所 TEL ② 3468
 芦屋市大原町216



daimaru
 神戸店
 電 3 8121



大丸特選

洋品雑貨

帽子・アクセサリー 2階
 ハンドバック・くつ
 ハラソル…………… 1階

コウベセンスで秋を演出!



目次

PHOTO / 神戸と女性・倍償千恵子・岩下志麻	1	30 座談会 / 神戸をデザインする	
連載随想第二回 / わが町の地の利・白川渥	2	宮崎辰雄・小原豊雲・滝川勝二・中西勝	
れんさい随想②		牛尾吉朗・西村雅司・山田芳信・挽地正雄	
神戸のこと手当たり次第・淀川長治	9	38 ピンクコーナー (T)	
連載・問わず語り / ⑥		40 表紙の言葉 / 小磯良平	
奇妙な青春・司馬遼太郎	12	43 BONSIOR MADAME / 山小屋	
私の好きなスター / 高美似子・小林芳夫	17	44 神戸うまいもん地図・私のランチタイム	
神戸だからえがく夢 No.10 / 藤本義一	18	46 神戸うまいもん巡礼 / 2・赤尾兜子	
随想 / みなと町こうべの印象・十返千鶴子	20	48 KOBEEKKO SHOPPING GUIDE	
花時計・レリーフ / 青木重雄・草野	22	52 ショート・ショート / ⑥	
<パリ通信から> 今秋のモード・福富芳美	26	サービス本位・陳舜臣	
AUTUMN SHOPPING	27		

表紙・小磯良平 / 撮影・米田定蔵・杉尾友士郎 / デザイン・橋昭三 / コピー・五十嵐恭子

わが町の 地の利

白川

渥

え・中
西

勝



何かの運り合わせて、この町に住みついてからもう二十六年になる。「終の栖」（ついのすみか）になりそうである。私も「神戸っ子」と言えるかもしれない。

それまで、グルミイな山陰の雨と雪との中で暮らしていた私には海山の明るさ、空のまぶしさが、心に痛いばかり沁んだ。ゲートルが「伊太利紀行」の中で、はじめてブルンネル峠を越えて南欧カルパ

チアの平原に出た時、

——太陽の光は熱く、われわれは再び神の存在を信じる

と、強い感激の言葉を綴っているが、山陰の冬を終えて、いきなり甲南の春光を浴びたあの年は、私にも亦そんな大げさな感慨があった。

私のような自由業には、とかく東京在住の方が便利がいい。それが、来年は、来年はと思いつながら、とうとう無期延期になってしまったのは、性来の腰の重さもさりながら、一つは、私の胃袋にこの町の空気が甘かったからであろう。

ところで、この頃、ゴルフを愉しみはじめてから、いよいよ住み心地の良さを痛感する。背山いたるところにコースがあるからだ。統計によると、コースの多いこと日本一だそうだが、東京で暮らしているは、こうも手軽にコース通いは出来ないであろう。

もっとも私の場合、ゴルフ馬鹿々になるまでにはかなり長い年月がかかった五、六年前、人にすすめられて少しクラブを振りまわしたことがある。コースの会員にもなった。東京の石坂洋次郎氏から入門書や雑誌のようなものが送られ、健康のためにしきりにやれやれとすすめてくれるが、私は十分健康だったし、何よりもゴルフ族なるものに少々抵抗を感じて、せっかく買った道具も物置に投げ込んだままだったが、去年竹中郁氏も始めたと知って、俄然、節を曲げた。節を曲げて、本当に良かったと思っている。遊びごとはいろいろやったが、こんな面白いものはない。しかも手近にコースがあるとと言う地の利を得たありがたさ。……何やら、わが残生、豁然とひらけた心地なのである。

暑中の旅行はバカの骨頂だが、この夏は、石坂氏の招きに応じて軽井沢でクラブを振った。野間講談社長、柴田鍊三郎氏らと連続三日ぶっ続けて、浅間山も見なかった始末。帰途、蓼科高原に若杉慧君の別荘を訪ねた。若杉君は神戸出身の作家だが、神戸の土産話よりも、ゴルフ勧誘のお喋りで一夜を明かしてしまった。久瀧の友に会って、せっかくの一夜をヨシもない遊び談議に明かしたことはひどく残念だが、会おうものを片っぱしから勧誘しないでいられない

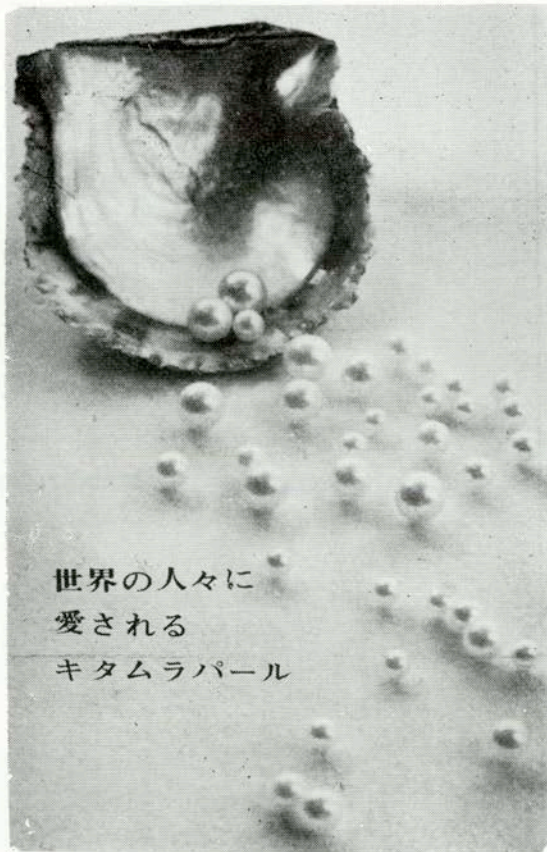


—写真—西宮カントリーにて、右前源氏鶏太氏左白川渥氏

のが、ゴルフアーの友情と言うものであらう。

F誌の招きで、蓼科から東京に廻って、炎熱の武蔵カントリーで岩田専太郎氏と一戦。F誌のI記者も同行。I君も岩専老(?)も遠来の客を遇する礼をわきまえていた。つまり、私が勝ったのである。しかもその夜、銀座の夜を案内してくれる情け深かさ。そこでやはり神戸出身の今日出海氏と出会って、神戸の話に花が咲いた途端、里心がついて一散にかけ戻った次第だが、この一週間の他流試合が大いに役立ったか、帰神早々にして、さるコンペで、優勝牌を授かる光栄に浴した。

ゴルフは愉しく健康的である。年寄りにも女にも向くスポーツである。レジャーブームの中で、最も望ましいものと言える。が、その大衆化を阻んでいるものは、何と言っても金がかかることである。ロンドンではタクシイの運転手も一ドルを懐にして、手軽にコース廻りをしているそうだが、わが国ではまだまだそこまではゆかないロンドンと言えば、郊外にコースの多いこと、世界第一だそうである。その理由は、殖林にも増産にも役立たない郊外の瘦せた丘陵地帯を利用したのだそうだが、そんな地形は、わが神戸とも相似ている。じっさい、舞子、垂水、三田、有馬のあたりのコースに行ってみると、ただゴルフ場のみ活用出来そうな丘陵がまだまだ空しく眠っている。その眠っている丘陵を開発して、市民のためのパブリック・コースをドシドシ増設すれば、一ドルのゴルフも夢ではあるまい。〳神戸へ行けばゴルフは安く出来る〳〳ゴルフ・コウベ〳〳わが町に、そんなカラーがあってもよいではないか。(作家)



世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村パール

北村眞珠株式會社

神戸/元町2・東京/スキヤ橋センター
TEL ③ 0072 (571) 8032

ヤマハピアノ

*初秋の暮しに

ヤマハのしらべ



U1D 88鍵・ビクイバー材
たて型・¥184,000



神戸もとまち

日本楽器

元町通2丁目 TEL ③ 1631-2



Fashion

VIENNALINE

世界のめがねがやって来た

神戸眼鏡院

元町3・電③3112-3・0551(貿易部)

世界中の人からほめられた
日本の誇り 神戸のほまれ

**マロン
グレッツ
セは
ヒロ
タの
銘菓**

元町通三丁目 TEL③二三四〇番

神戸のこと 手当り次第

淀川長治

え・松本宏



いまの神戸のお話があったが、やっぱり東京ずまいになって二十年。それで神戸……というところも昔ばなしになってしまふ。

しかもその「神戸」がむやみと懐しい。いまの神戸といえば今年の五月に私の甥が結婚して、それで国際会館でその式を挙げて、その足でなんとその花婿花嫁と花婿の両親と両家の知人一同で生田筋の「ムーンライト」に出向いて、そこで新婚夫婦をかこんでもう一度乾盃して、あげくのはてにみんなで踊りだして、新婚夫婦の踊る横でその初老両親がこれまた昭和はじめのステップで踊っているのを見てみると、やっぱり神戸だなあ……そう思うのであった。私は飲めない踊れない……それでボンヤリとその楽しき風景を眺めていたのであるが、そのときテーブルのはるか向うの四人の二組外人夫婦がしきりに私に手を振っている。なんであろうと、ちよっと耳か

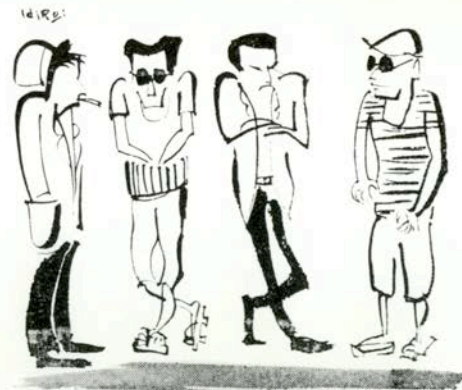
たむけ笑顔で振りむくと、向うも半分手まねで、手をニギニギして見せて、それから人指し指で自分の胸をさして云うことが「いつもアンタのテレビ見てまっせ」……「アンタのハートはなかなかヨロシマっせ、わしゃ好きや」……まさか外人がそんな関西べんは使いはせぬが、神戸というところ、そして神戸というところの外人の英語に私はそんなニュアンスを感じそう聞こえるのが妙であった。さて若夫婦は一夜おいてその翌日シャアシャアと九州へハニムーンに出かけて行った。ここいらにも、いかにも神戸っ子らしい匂いがした。またあの晩の「ムーンライト」というところを一目のぞいてもそのなんとなしの洗練された室内の飾りつけ、けばけばしさのないあか抜けさ……やっぱり「神戸」は生きている……へんな云い方だが私はそう思えて嬉しかった。

×

×

今はどうなったであろう。むかし神戸駅のすぐそばに「チョコレート・ハウス」という洋食屋……いまでいうレストランがあった。

テーブルが三つくらいいっぱいになるような小さな店であったが、このチキン・フライが忘れられない。野菜サラダも実に見事であった。テーブル・クロスが純白で洗いたてでナイフとフォークがピカピカして、そのナイフのよく切れること……実は、それよりもここで私は妙なことに感心してしまったのであった。というのはここへ御婦人づれで行ってチキン・フライを注文すると、出来あがったそのチキンの、かならずだきみというのであるのかしろみというのであるるかチキンの一番やわらかなほうを御客の婦人のほうにつける。男のほうもそれでいてなかなかうまいチキン・フライであるのだが、婦人向けと男子向きを考えて出すレストランは私はここ以外行き当ったことがない。聞けばこのきれいなオバアチャン主人は外人屋敷の女コックさんと云うことだった。ところで、どうして「チョコレート・ハウス」などという店名がついているかというところ、この小じんまりした四角い店の外がわはすっかりチョコレイト色のペンキが塗られていて、いかにも四角いチョコレイトを思い出してしまふからであった。もちろん洋菓子もなかなかうまいのが



あったが、私はこのナイフの切れあちのいいのが好きで、シャキッとして心地向くビーフ・カツやチキンの切れるのがたまらなくうれしかった。

×

×

バラケツ……というのを御存知であろうか、これはバラの花の一種ではない。神戸の特産で不良青少年のことである。関西でも一番柄の悪いのが神戸と兵庫で、兵庫のほうは少し大人っぽくってごろつきスタイル。これが少しハイカラとなるとバラケツだ。今日、愚連隊などと意張っているが神戸はそんなのはとっくの昔からバラケツの名で盛んだった。「おい、おまいチョット笑ろたるか」このわるたろかということは喜ぶこぼせてやろうかと云うことではない。「泣かしてやろうか」ということである。

それで私も三の宮から電車に乗ろうとしたとき五、六人のバラケツにとりかこまれた。

「あのな、すまんが電車賃借してんか」私はドキンとしたが「なんでや」と問い返した。「ないさかい、たのんでんねや」その一人がワカトルヤロという顔でそう云う。ところがこっちもこっち、「あほらしい、なんでまたウチが借さんならんのん」。

それで顔を借して……ということになって私はみんなに取りまかれて近くの居留地の公園に行った。夜も十時ごろであつたらう。松の根もとにベンチがあつて電灯がうすくらく足もとを照らしているところで「こら、おまえ、アホか」と一人が私の胸をこついた。

「そんなも知らんモンに金借すアホあるやろか」……そこへ私服のお巡りがきて私たちはそっくりみんな揃って交番に連れて行かれたそのときその私服が私の背中をドンと押して「こら、みんな来い」その連行（れんこう）というような味を今でも思い出す。

話がわかり私は「氣いつけなアカンでえ」と云われ私一人放り出されたが、やっぱり私にもその神戸っ子のバラケツの血があつたのである。今にして思うと、あれでは半殺るしにもなりかねまいとゾッとする。